

学位論文題名

ブラキストン「標本」史

学位論文内容の要旨

序論

生物学標本は、生物学のために残したものであり、採集地や採集年月日などの基本的情報がラベルの形で付けられている。歴史学の史料が史料批判を経て研究に利用されるのに対して、生物学標本は、製作された時点で学術資料としての洗礼を受けたものとみなされ、資料批判は十分に行われない。しかし、現存する標本をみると、採集者が付けたラベルの意味が保存・管理の過程で誤解されることもある。標本は寄贈・管理・保存の過程で資料批判の対象とすべき歴史資料という性格をもつことになるのである。標本を研究に用いるためには歴史資料としての標本に対する資料批判、標本管理史・成立史の知見が必要である。本論文は、ブラキストン標本を歴史資料として位置づけ、個別の標本とその総体について批判的に考察を行い、標本群の成立と寄贈・移管過程、移管先である博物館における管理体制を明らかにすることを目的としている。

第1部 ブラキストン標本の変遷と現状

幕末から明治初期にかけて函館に滞在したイギリス人商人トーマス・ライト・ブラキストンは採集人・福士成豊の助けを得ながら膨大な数の鳥を捕獲し鳥類標本(仮剥製)を作製して開拓使函館博物場に寄贈した。これらブラキストン標本のその後の変遷には諸説あるが、開拓使廃止後、一時的に函館中学校、札幌中学校、北海道師範学校、札幌農学校に分散して移管された後に、札幌農学校・北大農学部集中され、現在は北大植物園・博物館の所蔵となっている。

現在、北大植物園・博物館において「ブラキストン標本」とされるものは1350点であるが、標本の移管・保存の過程でブラキストンが当初寄贈したもの以外のものも含まれていることが推測できる。そこで、標本に付けられた十数種ののぼるラベルを詳細に検討した結果、「ラベル4」が付いた標本1314点がブラキストン作製のブラキストン標本とみなし得ることが明らかとなった。現在「ブラキストン標本」とされる1350点は、後の北大農学部動物学教室教授犬飼哲夫が整理した際に他標本の混入を招いた結果、数が増えたものと考えられる。

第2部 ブラキストン標本と鳥類図

現在、北大植物園・博物館が所蔵する「鳥類図」と東京国立博物館が所蔵する「ブラキストン図」はいかなる関係にあるのかを考察した。まず、開拓使函館博物場のブラキストン標本が1876(明治9)年から79(明治12)年にかけて3度にわたって開拓使東京出張所に貸し出され、開拓使東京仮博物場にて展示する目的で、開拓使が雇った絵師の手により鳥類図が描かれた。この間に、これら貸出標本の一部が博物局に貸し出され、博物局が

雇った絵師により『博物館禽譜』『博物館写生図』が描かれた。前者が北大植物園・博物館所蔵の「鳥類図」であり、後者が東京国立博物館所蔵の「ブラキストン図」である。

### 第3部 八田三郎・犬飼哲夫のブラキストン資料

A Brief Biography of Captain Blakiston, 1932 (『ブラキストン小伝』) を執筆した犬飼哲夫の旧蔵資料を詳細に検討した。これらのなかにはブラキストン自筆の開拓使物産課佐藤秀顕宛書簡(1881(明治14)年11月9日付け)の写真が含まれており、これには新館建設予定であった札幌博物場に函館にあるブラキストン標本を移管することを承諾する旨が書かれている。犬飼はこれを根拠として『ブラキストン小伝』において1881年、ブラキストン標本の一部が札幌博物場に移管されたと書いたと思われる。

ところが、現存の標本に関する本論文第1部の検討によってこの間に函館博物場の標本数の変動はないことがわかった。そこで、北海道立文書館所蔵開拓使文書を詳細に検討した結果、函館の有力商人たちが開拓使に札幌移管を取りやめるよう陳情するとともにブラキストンへも直接依頼し了承を得ていたことが新たに判明した。したがって、函館博物場のブラキストン標本の札幌移管の事実はなかったものと結論づけることができる。

### 第4部 ブラキストンと札幌博物場

開拓使は函館、東京、札幌に博物場を設立した。函館博物場は、独自に標本を収集・作製することはほとんどなくブラキストンから寄贈された標本が所蔵物の大部分を占め、当時のスタッフも専門的能力はさほど高くなかった。東京仮博物場には鳥類剥製製造人・村田庄次郎が在籍したが、開拓使廃止とともに鳥類標本は札幌農学校へ、村田も後に札幌農学校博物館に移った。

札幌博物場は、1877(明治10)年、札幌仮博物場として偕楽園内に開設され、施設が手狭になったために1882(明治15)年には新館が完成した。これが現在の北大植物園・博物館である。札幌博物場は、札幌農学校卒業生など専門的能力をもつ職員を擁し標本数も飛躍的に増加しており、開拓使廃止後は農商務省博物局、農商務省北海道事業管理局の管轄を経て札幌農学校に移管された。

他方、東京において文部省が設立したものとして、まず教育博物館(現在の国立科学博物館)がある。横浜の商社にいたイギリス人 H・J・プライヤーを雇って日本各地の動物採集、分類に従事させた。その結果、同館の鳥類標本は増加し、1881(明治14)年時点には1404点に達したのである。また、開拓使の各博物場と大きく異なる点として、国内外の博物館との間で資料交換を行い、外国産鳥類標本も入手することができた。また、内務省(後に農商務省移管)が管轄した国立博物館(現在の東京国立博物館)は、明治十年代には天産部(動物・植物・鉱物)において毎年1千点程度の標本数の増加がみられた。これらはスタッフによる採集や海外の博物館との交換により行われていた。

### 第5部 補論 明治初期の「自然史」通詞 野口源之助

ブラキストンをめぐる資料を検討するなかで、通詞・野口源之助が重要な役割を果たしていることが判明した。長崎生まれの野口は神奈川県通詞のときに英艦シルビア号に通詞として乗り込み北海道測量を経験し、開拓使東京出張所勤務時には開拓使上層部と御雇外国人の通訳および書簡の翻訳に従事した。西洋の学問への造詣も深く、金星過日(金星が地球に最も接近し、日本が最良の観測点とされた)のメキシコ観測隊の通訳としても活躍した。ブラキストンの研究協力者であるプライヤーが沖縄で発見したノグチゲラ(*Sapheopiponoguchii*) は、ノグチという日本人に献名されている。従来はプライヤーの採集人であろう

と推測されていたが、野口源之助とプレイヤーの足跡を克明に追跡した結果、ノグチと野口源之助は同一人物である可能性があることが判明した。

# 学位論文審査の要旨

|     |     |         |
|-----|-----|---------|
| 主 査 | 教 授 | 白木沢 旭 児 |
| 副 査 | 助教授 | 川 口 暁 弘 |
| 副 査 | 助教授 | 佐々木 享   |
| 副 査 | 教 授 | 諏 訪 正 明 |

## 学 位 論 文 題 名

### ブラキストン「標本」史

学位論文審査委員会は以下のように行われた。

第1回（平成17年11月24日）論文の構成、研究方法の妥当性について検討した。

第2回（平成17年12月1日）各部ごとに論文内容を検討し、申請論文の成果と問題点を明らかにするとともに口述試験の質問項目をとりまとめた。

第3回（平成17年12月15日）申請者の口述試験

第4回（平成17年12月15日）口述試験の内容を検討し、学位授与の可否を判定した。

第5回（平成17年12月21日）審査結果報告書の原案を検討した。

本論文は、北海道大学植物園・博物館が所蔵する「ブラキストン標本」とされる鳥類標本の来歴、性格を明らかにするとともに、明治期における日本の博物館の形成過程を、収蔵物とそれに関わった人々の動向という観点から明らかにしようとしたものである。近年、歴史学では博物館・博覧会への関心が高まってきているが、それらの多くは国民国家の形成に際しての啓蒙の手段という理解を前提として政策・思想に関心が集中する傾向がある。本論文は、こうした研究とは一線を画し、博物館形成史をいわば内側からの視点によって描くことを試みていることに大きな特徴がある。

ブラキストン標本の限定作業は、1300点余りの標本に付されたさまざまなラベルを、あたかも歴史学における一次史料（文書）のように厳密に分析することによって達成された。自然科学の研究素材を、いわば資料批判のふりいにかけることで、従来あいまいであったブラキストン標本が特定された。他方、博物館形成史という面では北大、北海道立文書館、国立国会図書館、海上保安庁所蔵の史料を駆使して関係者の行動を跡づけている。本論文は、着想・観点・方法において従来の日本史学の枠を超えるとともに、生物学・動物学のための資料学という性格をも有するものである。

本論文の成果は、第一に、1300点余りに達する膨大な鳥類標本を歴史資料とみなし、一つ一つの標本情報（一つの標本に複数のラベルが付されている）をあたかも文書（一次史料）のように詳細に検討し、さらには開拓使文書などの一次史料を博搜することによって標本の来歴、位置づけを明確にしたことである。これにより、標本を用いて行われる生物学・動物学の研究により正確な情報を提供することを可能とした。

第二に、明治期においてブラキストンをはじめとする外国人や彼らを受け入れた野口源之助をはじめとする日本人の活動を検討し、西洋の文化、科学が導入されてくる過程の一端を明らかにしたことである。明治期における東京、函館における膨大な数にのぼる鳥類標本の集積には、政府および御雇外国人の役割とともに、ブラキストンのような雇われずに貢献した外国人の存在と野口のような西洋文明に造詣の深い日本人の役割が不可欠であった。

第三に、明治期における博物館の成立過程をその収蔵物の収集、集積、管理という点から明らかにしたことである。歴史学における博物館史の関心は、殖産興業や欧米科学の啓蒙を日本政府がいかに行おうとしたか、という政策史、政治思想的側面に置かれてきたが、本論文は、そうした歴史学の傾向とは一線を画し、科学史的関心から博物館を取り上げている。博物館を設置する政策に加えて採集者、標本（剥製）製造者の存在、博物館スタッフによる分類、保存、管理の質が重要であること、また、保存・管理の過程において資料批判を怠ったがための過誤も生じることを明らかにした。

以上から、本論文は日本近代史、博物館資料研究の重要な研究成果であるとともに、科学史、動物学にも寄与するものとみなすことができる。ただし、論文に、序論に対応する終章（まとめ）がないことなど論文構成上の課題も残しているが、これも本論文の成果を低めるものではない。

19 世紀の日本における鳥類標本は現在では東京と札幌（北大）に集中しており、加藤氏は自身の研究拠点を最大限に生かしつつ、モノと文書を駆使する歴史研究という新たな方法を切り開いた。本審査委員会は慎重に審査し、以上の理由にもとづいて全員一致で本学位申請論文が博士（文学）を授与するにふさわしいという結論に達した。